

日本現象学会 2020 年度研究大会（第 42 回）シンポジウム
フェミニスト現象学は何をもたらさうか

政治哲学者 I. M. ヤングが 1980 年に発表した古典的論文「少女のように投げる：女性の身体の調和運動と空間の現象学」以来、フェミニスト現象学は国際的に大きなうねりとなった。ヤングが影響を受けたメルロ＝ポンティだけでなく、フェミニスト現象学のムーブメントは、まず、フッサール、ハイデガー、ボーヴォワール、サルトルの再評価・再検討を促し、さらには、E. シュタインなどドイツ女性運動に関わった初期現象学者の仕事を見直すことにもつながってきた。真に経験に迫る学問としての現象学のポテンシャルを示すという点でも、古典現象学の大規模な読み直しを促した点でも、近年例をみない「現象学運動」だと言ってよいだろう。

ヤングの論文から 40 年経ってようやく日本でもフェミニスト現象学が定着しつつある。先日出版された『フェミニスト現象学入門：経験から「普通」を問い直す』（中澤瞳ほか編、ナカニシヤ出版、2020 年）は現象学会の比較的若手の会員が編者となった書籍であり、また、『現実を解きほぐすための哲学』（小手川正二郎、トランスビュー社、2020 年）もフェミニスト現象学の成果を大きく取り入れた一般書である。これら著書の編者・著者や社会学の研究者に登壇していただき、フェミニスト現象学とは何か、現代の倫理学・社会学やフェミニズム運動においてどのような意義を有するか、古典現象学がどのように読み直されるのかについて論じていただき、フェミニスト現象学は何をもたらさうかを検討する。

提題者

江原由美子（横浜国立大学）

小手川正二郎（國學院大学）

中澤瞳（日本大学）

司会

池田喬 (明治大学)